【シンポジウム　プロクロス『神学綱要』とその影響作用史――中世まで――】

『神学綱要』と中世哲学

（司会）岡崎　文明

【1】シンポジウムのテーマについて

今日、ヨーロッパの学会における新プラトン主義研究の重心はプロティノスからプロクロスへと移行しつつあるように見受けられる。この動向にはプロクロスを思想史的に捉え直し新プラトン主義の意味を見直そうとする意図も見られる。

この意図は本会の理念にも適う。というのも本会もまた、新プラトン主義研究において、西洋の思想史をこれまでの如く古代、中世、近世、現代といった仕方で輪切りにして扱うのではなく、思想史全体の中で新プラトン主義の位置と意味を見出そうという目的を持っているからである。そこでこの度は、右記のヨーロッパの動向に呼応して、我々独自の視点から、標題のごとく、プロクロスがシンポジウムのテーマに設定された。これは本会会長の見識である。

今日のヨーロッパにおける新プラトン主義研究は、必ずしも彼ら自身にとって容易なものではないように思われる。なぜなら、中世以降のキリスト教的西洋では、新プラトン主義は長らく警戒の目で見られ、まかり間違えば「異端思想」として葬り去られる危険な思想でもあったからである。それにもかかわらず、キリスト教の組織神学形成に果たした新プラトン主義の役割には無視できないものがある。今日までの歴史において西洋が作り上げてきた新プラトン主義像は異端の危険を回避しつつも、なお有用な部分を取り入れもするという際どい思索の試行錯誤の所産である。このような歴史的経緯からしても、今日でも西洋の人々には無意識のうちに新プラトン主義に対する自己規制が働いているように思われる。かかるバイアスの下で、彼らに課せられた作業は容易なものではないことが想像される。ところが我々には元々そのような枷はない。したがって、この研究テーマは我々の独自性を発揮する場となり得るであろう。

【2】古代ギリシアの世界観とキリスト教的西洋の世界観

古代から今日までの西洋思想史全体を顧みれば、この二千年間のキリスト教的西洋には、古代ギリシアの思想を自らの思想空間に座標変換すべく、多くの思想家達の格闘があった。また、古代ギリシア像の構築が試みられてきたものの、その像は今も

なお確定を見るに至ってはいない。それほど古代ギリシアの思想は深く広くかつ可能性に満ちた豊穣な思想であって、ヘブライズムに調和するように簡単に変容できるような思想ではない。我々は今日これを新プラトン主義の影響作用史において確認することができる。

今日見えにくくなっているが、古代ギリシアの世界観とヨーロッパ（西洋中世以降）のそれとの間には根本的な相違が見られる。それは、新プラトン主義を狭義のヘレニズム時代の「老人の哲学」として捉えるのではなく、古代から現代に至る西洋哲学史を貫く思想であると捉えることによって露わになる。

それは世界観の原点となる「万有の根源」の捉え方における根本的な相違である。新プラトン主義の「善一者」を「知性・存在・生命」(trias)を超越した原理と捉えるか、それとも「知性・存在・生命」に内在し一体化した原理と捉えるかの相違である。換言すれば、新プラトン主義を「善の哲学」（古代ギリシア哲学の重要なひとつの特徴）と捉えるか、それとも「存在の哲学」（ヨーロッパ哲学の重要な特徴）と捉えるかの相違である。[1]

古代ギリシアの新プラトン主義は前者に属し、西洋中世以降の新プラトン主義（キリスト教的新プラトン主義）は基本的には後者に属する。したがってここに根本的に異なった二種類の世界観があることになる。この両者を共に「新プラトン主義」とする根拠は何か。これは解明すべき一つの課題である。

今回のシンポジウムはかかる課題をも含みつつ遂行されたが、しかしこれに関しては解明に至らず、今後の課題に残された。

【3】古代新プラトン主義

プロクロス哲学はプロティノス哲学を直接の源流として形成されたが、両者は共に古代ギリシア哲学つまり「善の哲学」の系譜に属する。両者の間にはポルピュリオスなどの媒介者が存在している。堀江論文は「プロクロスにおける実体の帰還とはいかなる意味か」という問題を提起し、プロティノスからポルピュリオスを介してプロクロスに至る思想史の流れにおいて緻密に各テクストの分析をなし、「実体の帰還とは実体変容ではなくて、自己存立を意味する」と明確に結論する（この思想は山崎論文にあるごとく、一三、一四世紀のディートリッヒやベルトルトの「知性の自己認識による自己存立性」の概念の中に受け継がれている）。これは卓見である。また、注におけるプロクロスに関する基本文献の解題も要を得て有益である。

【4】キリスト教的新プラトン主義

(i) プロティノス哲学の変容

古代新プラトン主義の哲学的伝統は西洋中世において変容を蒙りつつキリスト教神学に滔々と流れ込んでいく。

まず、教父哲学において、プロティノス哲学はアウグスティヌスによって変容され受容される。アウグスティヌスは『エネアデス』の数編のラテン語訳を読み、これをきっかけにして神秘体験を経験するなど知的刺激を大いに受けたが、「プロティノスには仲保者の名が無い」としてキリスト教に調和しない部

分を削ぎ落とし、調和的で有用な部分のみを選択的に変容して受容した（*Confessiones*, VII）。ここにはアウグスティヌスには「新プラトン主義はキリスト教とは異なった教え（異教）である」とする評価が見られる。

アウグスティヌスの「変容」は既述の如く「善の哲学」を「存在の哲学」へ組み換え変換することを意味している。この姿勢は西洋では彼以降も保持されていく。

(ii) プロクロス哲学の変容

①『ディオニシウス・アレオパギタ文書』

アウグスティヌス没後、プロティノス哲学は西洋思想史の表面から姿を消して伏流となる。それに代わってプロクロス哲学が姿を現す。

プロクロス没後間もなく（五〇〇年頃）東方キリスト教思想圏に『ディオニシウス・アレオパギタ文書』が現れる。これはプロクロス哲学に色濃く染め上げられたキリスト教神学の文書である。ここではこれ以上触れないが、同書はラテン語に訳されて次第に西方キリスト教思想圏に影響を与えて行く。

②『純粋善論』とそのラテン語訳『原因論』

さて、九世紀になるとイスラーム思想圏で『純粋善論』がアラビア語で成立する。これはプロクロス『神学綱要』からの「抜粋」とされる（トマス・アクィナス）。これが一二世紀にラテン語に訳されて『原因論』となる。以後ヨーロッパにおいて『ディオニシウス・アレオパギタ文書』と共に『原因論』には多くの註解書が作られる。

ところで、『神学綱要』がアラビア語の『純粋善論』に抜粋された時にイスラーム教（キリスト教と共にヘブライズムに属する）にとっての異教的要素が切り落とされて変容（存在論化）されている。ここから、『純粋善論』つまり『原因論』は『神学綱要』の「抜粋」などという軽い著作ではなく、「善の哲学」を「存在の哲学」に座標変換した重要な意味を持つ著作であることが判明する（トマス・アクィナスは『原因論』の意味を軽く考えていたことになる）。

そして『神学綱要』が斯く存在論化（無毒化）されたが故に、『ディオニシウス・アレオパギタ文書』や『原因論』を介してプロクロス哲学は西洋に浸透し易くなったように思われる。このようにしてプロクロス哲学は西方キリスト教思想圏に影響作用を及ぼしていく。

この『原因論』とトマス・アクィナスとの関係を解明しようとしたのが藤本論文である。これを要約すると「トマスの『原因論』評価の変化の様子を解明する」ことを主題にし、「トマスは、前期においてはアリストテレスの強い影響下で『原因論』に厳しい評価を加えていたが、最晩年の『原因論註解』においては、新プラトン主義をいっそう知るに及んで穏やかな評価に変化した」と結論している。するとここにトマスの思想的発展を見て取ることができる。トマスを発展史的に解釈するこの試みには興味深いものがある。

このように『原因論』や『ディオニシウス・アレオパギタ文書』等によって存在論化されたプロクロス哲学の部分的理解を介し

て、『神学綱要』そのものに向かう態勢が次第にヨーロッパの思想界に醸成されていった。

③『神学綱要』への論駁と展開

やがてプロクロス理解は熟し、『神学綱要』の「部分」(『ディオニシウス・アレオパギタ文書』や『原因論』)ではなくてその「全体」に対する『論駁書』が出現した。最初のそれは一二世紀に東方教会のメトーネの司教ニコラウス(Nicolaos Methone, ?-1165)によってギリシア語で著わされる。[2]

西方キリスト教思想圏では、一三世紀に至って初めて『神学綱要』そのものがラテン語に翻訳され、その全貌が露わになる。[3]これを訳したのはモルベッカのグイレルムス(Guillelmus de Morbecca, 1215-1286)である。トマス・アクィナスは親友の手になるこの翻訳を読んだ。しかしトマスはこれを註解しなかった。キリスト教教義との余りにも大きな相違のゆえに、遂に同書を註解することができなかったように見受けられる。というのも、神は「存在を超越した善」であるのかそれとも「善と並ぶ存在」であるのか、という困難に突き当たり、トマスは解決できずに悩んだのではないかと推測されるからである。彼が『神学綱要』を註解するには時代が未だ熟していなかった。その代わりにトマスは『原因論』を註解してプロクロス哲学を部分的に受容するに留まったのであろう。

そしてようやく一四世紀に至って初めて『神学綱要』のラテン語による註解書が出現する。それはモースブルクのベルトルト(Bertholdus de Mosburch, ?-1361)によって著わされた。[4]ベルトルトはトマス・アクィナスの残した右記課題を引き継いで探究をさらに推し進めて展開するのである。

それを扱ったのが山崎論文である。要約すれば「『神学綱要』が中世においていかに受容されて行くかをベルトルトの『プロクロス神学綱要註解』において解明する」と問題を提起し、ディートリッヒの知性論を介して解明を試みている。そして「ベルトルトは『プロクロス神学綱要註解』においてエックハルトの目指したものを、異端断罪を回避する仕方で受け継ぎ、自らの〈最も神的な哲学〉の構築を目指した」と結論されている。本論文は氏のエックハルトに関する博士論文を土台にして執筆されている。

【5】結論

古代ギリシア哲学の総括とされる新プラトン主義はプロティノスに始まりポルピュリオス等を経てプロクロスに至る。そして特にプロクロスの哲学はヨーロッパ思想界に大きなインパクトを与える。これはトマスも突き当たったであろう「万有の根源」に関する難問にあった。山崎論文によると、ドミニコ会士ベルトルトは同修道会のトマス、ディートリッヒ、エックハルト等の思索を受け継ぎつつ、この難問に向かった。そしてベルトルトは自らの「最も神的な哲学」を『神学綱要』の中に見出し『註解書』を著わした。

しかしこれもプロクロス哲学から見れば未だ不徹底である。この難問は直接的には次のルネサンス時代に受け継がれる。二〇一〇年度の大会におけるシンポジウムではルネサンス時代におけるプロクロスの影響作用史が解明されることになるであろう。しかしそれで尽きるわけではない。プロクロスの影響作用はさらに近世のヘーゲルに至る。

この難問は宗教上の問題ではなくて「哲学史」の問題である。いやむしろ勝れて「哲学」の問題であると言うべきであろう。

【註】

（1） 拙論「善一者論に向けて」（渡邊二郎監修、哲学史研究会編『西洋哲学史再構築試論』昭和堂、二〇〇七年、所収）を参照。

（2） *Nicolas of Methone, Refutation of Proclus' Elements of Theology, A Critical Edition with an Introduction on Nicolas' Life and Works by Athanasios D.Angelou*, Leiden,1984.

（3） *Proclus, Elementatio Theologica, translata a Guillelmo de Morbecca, Herausgegeben von Helmut Boese*, Leuven, 1987.

（4） *Berthold von Moosburg, Expositio super Elementationem Theologicam Procli* については山崎論文の注1参照。